

新 治 廃 寺

——久地楽長町窯跡予備調査報告書——

1984・3

茨城県真壁郡協和町教育委員会



上 1号瓦窯跡

下 1号銅製鍊炉



序 文

協和町の歴史は無土器時代にはじまり、縄文時代以来の祖先の足跡が町内各所に数多く残されており、文化財の宝庫と言っても過言ではないと思います。

このたび、工房跡と思われる新治廃寺跡関連遺跡「久地楽長町遺跡」の予備調査を実施し、ここに多くの成果を得られましたことは、文化財保護を推し進めるうえで大変重要な調査であったと思います。

この報告書が教材として、学校教育や社会教育に活用されるとともに、町民の文化財に対する認識をなお一層深めることになるものと念じております。

なお、このたびの調査にあたり、関係各位の御協力、御指導をいただきましたことを、厚く御礼申し上げます。

昭和59年 3月27日

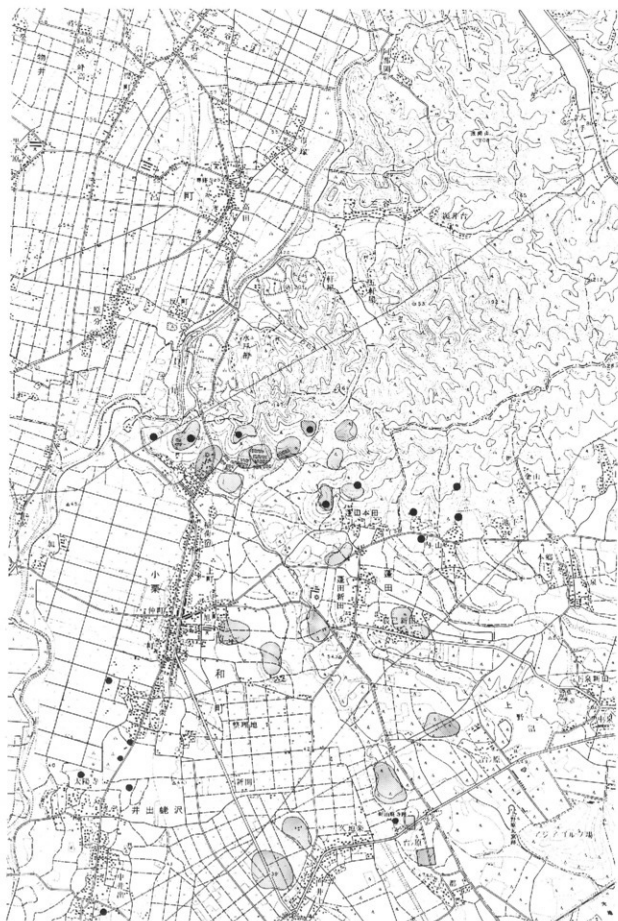
協和町長 浦 井 亀 三

凡 例

- 1 昭和58年5月21日から3日間の予備調査報告である。
- 2 調査体制は高井勇二郎氏を調査主任として、町文化財審議委員、領域研究会が調査にあたった。
- 3 今回の予備調査は、遺構の性格を把握するだけにとどめた。
- 4 調査後の整理、実測、拓本、写真撮影は領域研究会がおこなった。
- 5 本書の編集責任は領域研究会にある。



新治廃寺 新治郡衙跡関連写真



遺跡の 「新治の郡 東は那賀の郡の堺なる大き山、南は白壁の郡、西は毛野河、北は下野と常陸と二つ
環境 の國の堺にして、即ち波太の岡なり。古老のいへらく、昔、美麻貴の天皇の取宇しめししみ世、

東の夷の荒ぶる賊俗、阿良夫流爾斯母乃といふを平討たむとして、新治の國造が祖、名は比奈良
珠命といふものを遣はしき。此の人罷り致りて、即ち新しき井を穿るに、今も新治の里にあり。
隨時祭を致す。其水淨く流れき。仍ち、井を治りしに因りて、郡の號に着けき。爾より今に至
るまで、其の名を改めず。風俗の感に、白遠ふ新治の國といふ。(以下略)」と常陸國風土記に
記載されている。この新治國は律令期には常陸國新治郡となる。和名抄では新治郡に「坂門、
竹島、沼田、伊讃、博多、巡廻、月波、大幡、新治、下真、巨神、井田」の郷名がみえる。

新治郡の郡の役所は現在の古郡北原にある国指定史跡新治郡衙跡であり、その郡の寺が久地楽
にある国指定史跡新治庵寺跡である。これらの遺跡は昭和14、16年にかけて、藤田清、高井埴
三郎両氏によって発掘調査され、『常陸國新治郡上代遺跡の研究』1944を上梓している。

協和町の遺跡分布図をみると、北寄りに遺跡が集中してみられる。このことは地勢との関係
が考えられる。北部は浅間山の支線の先端部が小貝川に接しており、この丘陵上に遺跡が集中
する。小栗浦山、宮本のオッコシ遺跡からは先土器時代の資料が出土しており、谷島静訓「宮
本のプレ縄文石器について」『古代常陸文化』1955に報告されている。

縄文時代の遺跡は、小栗地区に多く遺存しており、宮本A～C遺跡、らいきま山、七ツ池東
方A・B、旧小栗中学校内、中台、蓬田、石畑、蓬田東原一区の各遺跡があり、その他には久
地楽台、横塚古堂遺跡がある。しかし小栗地区は別にしても、観音川と小貝川にはさまれた門
井付近から南には、小支谷が発達した台地がみられることや、他の地域の遺跡分布とも考え合
わせると、必ず未確認の遺跡が分布しているはずである。このことは縄文時代に限らず、奈良
・平安時代まで同じ傾向をもつものと思う。弥生時代以降、すなわち稲作文化以来小栗地区は、
地形的にみて、生活の場としてのみ限定されて利用された地域ではなく、この地域には古
墳が多く、また、火葬墓、経塚などが多くみられることから幕僚的な性格をもっていた地域と
考えられる。この古墳の中でも、新治庵寺の北約700～800mにある古郡台古墳は、昭和43年に
調査された。同古墳の主体部は無櫓の横穴式石室で、羨道と玄室の堺に立石を入れ、玄室はそ
のまま棺ともなっている。床面は小石が敷きつめられている。両側壁は板石の小口積みをして
いるが、奥壁は1枚である。玄室には、人骨、耳飾り、剣、鉄鍬が出土している。人骨は50歳
前後の男性と鑑定されている。石室の形状、副葬品等から、当古墳の年代は7世紀末頃と考え
られ、新治國造の後裔である大領家の人の墓と思われるものである。庵寺、郡衙が存在する時
期の集落としては、庵寺の西対岸にある久地楽試験場内遺跡がある。

久地楽町遺跡は郡の寺を建造するための工房跡群であり、特に瓦窯は、岩瀬町上野原瓦窯
跡、内山瓦窯跡と同じ時期に操業されていたようであるが、窯跡の広がりは今後の調査を待た
ねばならない。瓦窯跡に近接してみられる銅製遺構については、断面観察だけであるため、
その形状、性格は明確ではないが、炉に使用された瓦は、瓦窯跡出土のものと同時期であるこ
とから、郡の寺に使用する銅製品を作るためのものと考えられる。

遺 構

今回の予備調査の目的は、削平された後の遺構遺存状態を調べることにあったため、報告する遺構は、瓦窯跡が平面プランと遺物の状況図、銅製錬炉跡は切断された断面土層図と、遺構の断面観察図だけになる。いずれ正式な調査がなされることを想定して、遺物等については現状のままで保存を図った。

遺構が確認された場所は、標高36mから40mの西に傾斜する浅い支谷部で、水田面との比高差は4～8mである。新治廃寺域の北西コーナは、今回確認された遺構から約100m東にあたり、寺域と近接しているのが特徴である。

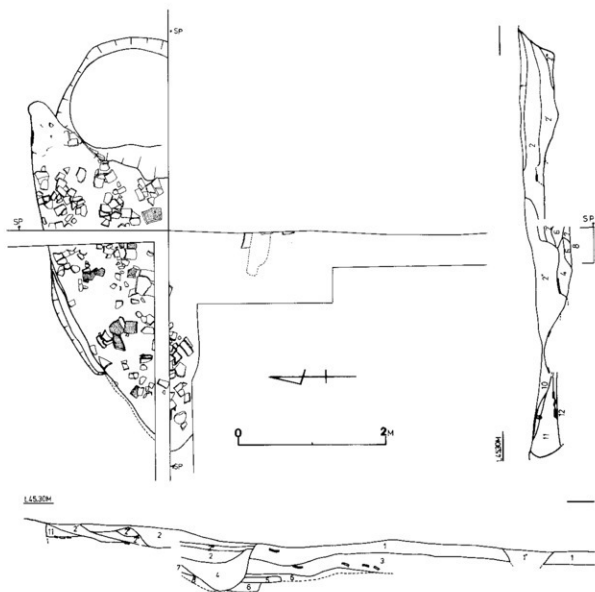
1号瓦窯跡 削り取られた部分に図版2上段のような落ち込みがみられ、覆土内に木炭、焼土、瓦片などが入っていることから、南北方向の傾斜に沿って窯が位置していると考え、中央にセクションベルトを残すようにして調査を進めたところ、南側の部分は、後世の攪乱を受けた状況を呈し、この部分は窯壁の南側一部を崩壊していることが判明した。このことは、第2図の断面にみられるように窯跡を切断した状態がみられる。土層中には木炭、焼土がブロック状に入る。

窯の確認面最長は5mで、最大幅は約2mである。窯壁の上部は土取りにより削られてしまっているため、窯底に近いラインが残っているものと考えられる。確認できた部分は窯灰と煙道、それと焼成部である。焼成部は瓦を残しているため、底面の形状は確認してない。煙道はわずかであるが立ち上がりを確認できたが、残りが少ないため上部の形状は不明である。窯全体の形状は、舟底形を呈しており、ボーリング結果では、底面は登り勾配をもつものと思われる(第2図)。

銅製錬炉跡(1号) 緩斜面の中にまずローム土、白色粘土を約1.6m程掘り込み、焼土、礫、灰などを混じった土を互層に埋めてゆき、掘り込みの中間付近で、白色粘土と瓦によって炉の最下底部を形成し、再度白色粘土、スサ入り粘土により炉を形成している。断面でみる限り右側の炉を最初に作り、その後左の炉に作り変えているのがわかる。なお、どの時期に作られたかは不明であるが掘り込みを埋めた後、配水路を作るため埋り込まれており、配水路内には瓦片が敷きつめてあり、暗渠となり、西側水田の方向にまで続いている。炉の構築状況からみても、炉構築前に設置した可能性をもっている。炉壁には銅の付着が顕著で、銅滓、鉄滓も出土している(第3図)

2号炉 1号炉の西側に位置し、断面にわずかに確認されている。炉の形状は不明である(第3図)。

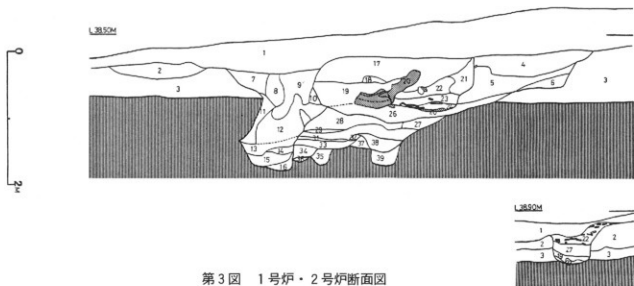
遺構の時期についてみると、瓦窯跡はI期瓦が多くみられることから、創建時には操業を開始していたと考えられる。銅製錬炉1号は、創建時の瓦を使用していることもあり、瓦窯跡と同じ頃には操業していたものと思われる。



第2図 瓦窯跡平面図、断面図

土層解説

1. 黒褐色粘質土—木炭・灰を含み二次堆積
2. 明茶褐色土—耕作土。
- 2'. ◇ —耕作土に黒色土が混入する。
- 2''. ◇ —耕作土に焼土・黄灰色粘土が混じる。
- 2'''. ◇ —耕作土の中に黄灰色粘土が混じる。
3. 暗黒褐色土—木炭・瓦等を含む。(二次堆積)
4. 黄茶褐色土—黄白色粘土が混じる。
5. 赤褐色焼土塊—窯壁で移動されたもの。
6. 黄褐色粘土—黄白色粘土が混じる。
7. 黄白色砂質土—地山。
8. 黄白色粘質土—◇
9. 青灰色焼土—窯壁。
10. 赤褐色焼土—窯壁。
11. 黄褐色土—窯壁が混じる。
12. 窯床



第3図 1号炉・2号炉断面図

- 1 表土(耕作土) 茶褐色土, 焼土粒, 瓦片, 細礫(1cm前後)を少量含。ややしまっている。
- 2 黄褐色土 ローム層, ややしまっている。
- 3 灰白色土 細礫混入の粘土層(粘質)。
- 4 黄褐色土 粘土ブロック, ソフトロームブロック, 礫少量含。木炭粒, 珪石粒多量含。ややしまっている。
- 5 黄褐色土 ソフトロームブロック多量含。礫, 焼土少量含。珪石粒壁側にやや多くみられる。しまっている。
- 6 褐色土 ロームブロック少量下部に堆積。礫, 粘土ブロック極少量含。珪石粒多量含。しまっている。
- 7 茶褐色土 焼土粒, 瓦片極少量含。粘土少量(ブロック化)含。I層の流れ込み少量。細礫, 木炭極少量含。
- 8 黄褐色土 ロームやや多量含。礫, 珪石粒, 焼けた粘土(黒), 焼土粒, 木炭極少量含。しまっている。
- 9 暗褐色土 ローム粒, 焼土粒, 粘土粒, 珪石粒, 細礫少量含。瓦片(上部層に堆積)。しまっている。
- 10 褐色土 ローム粒, 粘土粒, 珪石粒, 礫, 木炭粒, コークス粒, 少量混入含。しまっている。
- 11 暗赤褐色土 焼土灰, 木炭多量含。粘土, 礫やや多量含。全体的にポロポロしている。
- 12 黄灰褐色土 ローム多量含。粘土ブロックやや多量含。焼土ブロック, 珪石粒少量含。粘質あり。しまっている。
- 13 褐色土 ローム, 粘土ブロック多量含。瓦, 木炭, 焼土極少量混入。ややポロポロしている。粘質土層。
- 14 灰褐色土 粘土多量含。灰やや多量含。木炭, 焼土極少量含。ポロポロしている粘質土層。ローム少量。
- 15 暗灰褐色土 粘土多量含。灰やや多量含。木炭, 瓦片極少量含。
- 16 青灰褐色土 粘土多量(礫を多く含む地山)含。堅い。
- 17 褐色土 ローム, 粘土粒やや多量含。礫, 珪石粒少量含。瓦片極少量含。焼土, 木炭少量混入。しまっている。
- 18 赤褐色土 (焼けたローム粒) 焼土多量含。細礫, 木炭極少量含。堅くしまっている。
- 19 暗褐色土 粘土粒多量含, 焼土粒やや多量含。珪石粒, 細礫少量含。木炭極少量含。しまっている。
- 20 暗灰褐色土 粘土粒多量含。珪石粒, ローム粒, 礫やや多量含。ややしまっている。
- 21 褐色土 ローム粒, 細ロームブロック少量含。粘土粒, 木炭粒, 焼土粒, 珪石粒少量混入。やややわらかい。
- 22 黄褐色土 ローム粒, 粘土ブロックやや多量含。瓦片, 焼土, 木炭極少量含。ややしまっている。
- 23 灰褐色土 粘土ブロック, ローム粒やや多量含。ポロポロしている。やわらかい。
- 24 灰褐色土 23とほぼ同じ。ややローム多量含。サラサラした感じの層。スラグ, 灰やや多量混入。
- 25 褐色土 粘土, 粘土ブロック多量含。灰, ローム少量含。瓦の下部に灰多量含。しまっている。
- 26 褐色土 粘土ブロック, ロームやや多量含。灰, 焼土, 木炭, 珪石粒全体的に含。しまっている。
- 27 黄褐色土 ローム土, 粘土ブロックやや多量含。ややしまっている粘質土層。
- 28 暗褐色土 粘土ブロック, 粘土多量含。ロームブロック, 灰, 木炭, 礫やや多量含。ややしまっている。
- 29 黄褐色土 ローム多量含。灰, 粘土, 木炭やや多量含。しまっている。
- 30 黄灰色土 礫を多く含む粘土層。ローム少量含。木炭, 珪石粒極少量含。しまっている。
- 31 黒灰色土 木炭, 灰多量含。焼土粒, 粘土やや多量含。やややわらかい。粘質土層。
- 32 黄赤褐色土 粘土, 焼土やや多量含。しまっている粘質土層。
- 33 茶赤褐色土 灰, 焼土粒, 粘土粒多量含。やややわらか粘質土層。
- 34 黒灰色土 粘土, 灰, 木炭多量含。焼土粒やや多量含。ポロポロした粘質土層。
- 35 暗灰色土 粘土, 粘土ブロック, 灰, 木炭やや多く混入。ポロポロした粘質土層。
- 36 黄灰色土 木炭を少量含む粘土層。
- 37 灰褐色土 礫を含む粘土層(地山)。堅い。
- 38 黄灰色土 礫を含む粘土層。
- 39 灰褐色土 微細礫混入の砂質層(地山)?。

遺 物

遺物は瓦を主とするが、予備調査ということもあり、遺構内での細分化はしていない。1号瓦窯跡は、窯内を4分割し、各区ごとに取り上げたが、削平による土混入により、窯内の瓦の状況が明確になった段階で瓦の取り上げを中止し、現状のまま残している。それ以外のものは、1号瓦窯跡の灰原になる部分のもので、1号瓦窯跡の方向が確認できない時、この部分を2号瓦窯跡としたため、一部の遺物は2号瓦窯跡で整理されている。1号炉出土の瓦は、炉壁の基礎に使用されたものと、炉の配水路内に暗渠にするため埋め込んだものである。

軒丸瓦 複弁花文と単弁花文の2類に分けられ、周縁はいずれも素文縁の内側に面違いの鋸歯文を帯状に廻らせている。

I類A群鋸歯文縁複弁八葉花文軒丸瓦 (第4図1・2) 八葉の複弁は間弁を入れずに並び、花弁はほそながい弁子をつつむ二重の輪郭線から成る。弁子は長く肉乗りし、輪郭は弁端で広がって反る。2本の輪郭線は弁端で太くなるが、鋭い線で構成されている。花弁のつけねは、深く子房部に締められるために花弁に反りをみせる。子房部はうずたかくつけられ、内に蓮子を1+8(復元推定)を入れている。周縁は素文の地に1段を画して、面違い鋸歯文帯をめぐらしている。下顎部は平行叩きを残す。瓦当全面体に承切り痕を残す。面径18~18.8cm(復元推定)。子房径不明(新治廃寺出土のものは5.5cm)。厚さは薄手、中手、厚手があり、薄手は黒鼠色を呈し、厚手のものは暗褐色を呈する。

I類B群鋸歯文縁複弁八葉花文軒丸瓦 (第4図3~5) A群に瓦当面の構成は似るが、子房は細い凸線によって輪郭をもって区画されており、花弁はA群より反りはみられず、線も肉乗りを失っている。ここに表示したB群の3~5のものは、子房内の蓮子の間に範割れが同じようにみられることから、同範であろう。ただ3については瓦当面がかなり崩れても範傷が同じ所にみられる。面径、子房とも1割ほど大きい。

I類 鋸歯文縁単弁十六葉花文軒丸瓦 (第4図6) I類の複弁花文の花弁がごまかくわかれて単弁となるものである。弁子はさらに細ながくなり、輪郭線もほそく、肉乗りをうしなっている。子房はややうずたかくしているが、その周縁に細い隆帯をめぐらしている。この形式はI類A群、B群の折衷のようなものである。蓮子は1+8をいれている。周縁は、素文の内側に1段を画し面違い鋸歯文をめぐらし二重にみえる。この鋸歯文の鋸歯は、あらい波状の陰刻線を描くように付されており、I類とは施文法が異なる。面径は19.4cm、子房径6cmでやや薄手である。

軒平瓦 重弧文系と唐草文系のものに分けられるが、素文が1点出土している。

三重弧文軒平瓦 (第5図1) 新治廃寺出土で分類された薄手で段顎部は8

mmほどの浅いものである。重弧文は手描きで三角状に5mmほど掘り込んでいる。凸面は瓦当面に直角に平行叩き痕を残す。胎土は緻密で、色調は灰褐色を呈している。

唐草文軒丸瓦 (第5図2～5) 内区の唐草文の配置は、中心飾の左右に均等に配されており、内区線の外側には細粒48の珠文をつけ、突起した二段の外周がこれを包んでいる。この唐草文は同范のものと思われるものが多くみられるが、凸面の叩きが縄叩きと、格子叩きの2種の他、ヘラ削りのものの計3種がみられる。

格子目叩き 格子は長方形を呈し、長辺17mm、短辺5mmで瓦当面に直角にみられる。この叩きは平瓦にもみられ、この叩きのあるものは、凹面の布目を削り取っている。唐草文は比較的シャープである。特徴としては、中心飾の左1段目の右下から左上に反転する草文に筈癖がある。

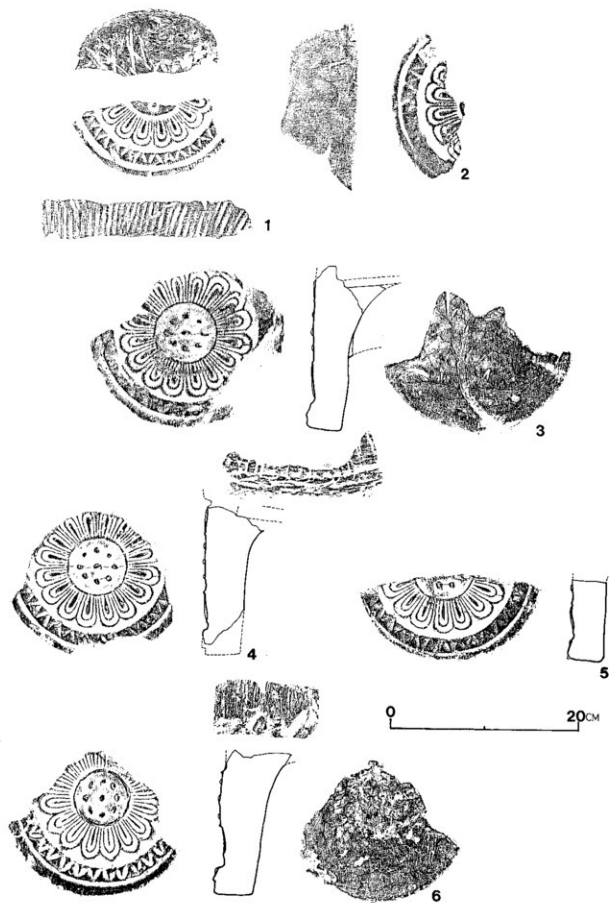
縄目叩き 荒いR.L.燃りの縄文を横まきにして瓦当面に直角に叩いている。格子叩きのある軒平瓦の外区は2段の外周がみられるが、この種のもは1段の外周のみで、わずかに内側の段の痕跡が一部に認められる。唐草文は比較的シャープであり、格子叩きの軒平瓦に認められる中心飾の左1段目の唐草に、同じような筈癖をみることができる。凹面は糸切り痕が明確で、布目痕がわずかに糸切りの凸面部に確認できる。

ヘラ削りの平瓦は、凸凹両面ともヘラ削り調整が施されたもので、第5図5にみられるように、縄目叩きをヘラ削りで消しているものもみられる。瓦当面の唐草文は、比較的シャープなものと、二度押しのため文様が甘くなっているものもあるが、他の唐草文と同じ傾向をもつ。

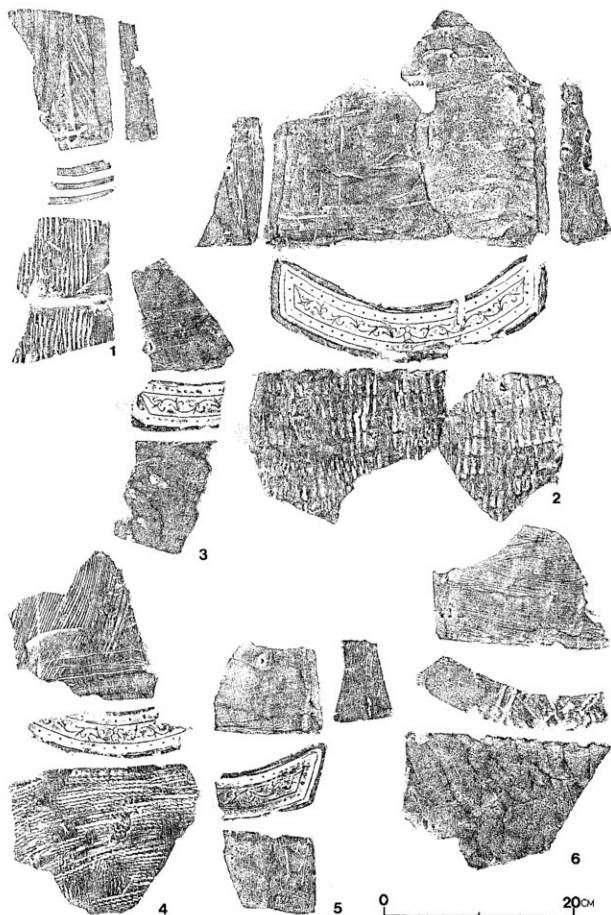
平瓦 凸面調整痕は平行叩き、格子叩き、縄目叩き、素文(ヘラ削り、ナデ)等がみられるが、各々の数の比率は予備調査のこともあり、本調査後にまとめたい。

丸瓦 本瓦葺用と行基葺用の2種に分けられる。本瓦葺用は玉縁で、凸面の調整は素文が中心で、破片の数が少ないため計測はできない。行基葺用は格子目叩き、平行叩き、素文の3種が認められる。

今回の予備調査で瓦窯跡から取り上げた一部の瓦、灰原から採集したもの、周辺部で表採したものの一部を報告したが、いずれも高井樺三郎『常陸国新治郡七代遺跡の研究』1944で報告された瓦類と一致するものである。特に軒丸瓦I種B群のものは、子房内にみられる范割れの特徴から同范であることが確認されたが、同じものが上野原瓦窯跡、新治廃寺にもみられ、当時の瓦生産の実態をみることができる。なお、今回分類した軒丸瓦は、前掲報告書の複弁第一種=I類A群、第二種=I類B群、単弁第一種=II類である。



第4図 軒丸瓦



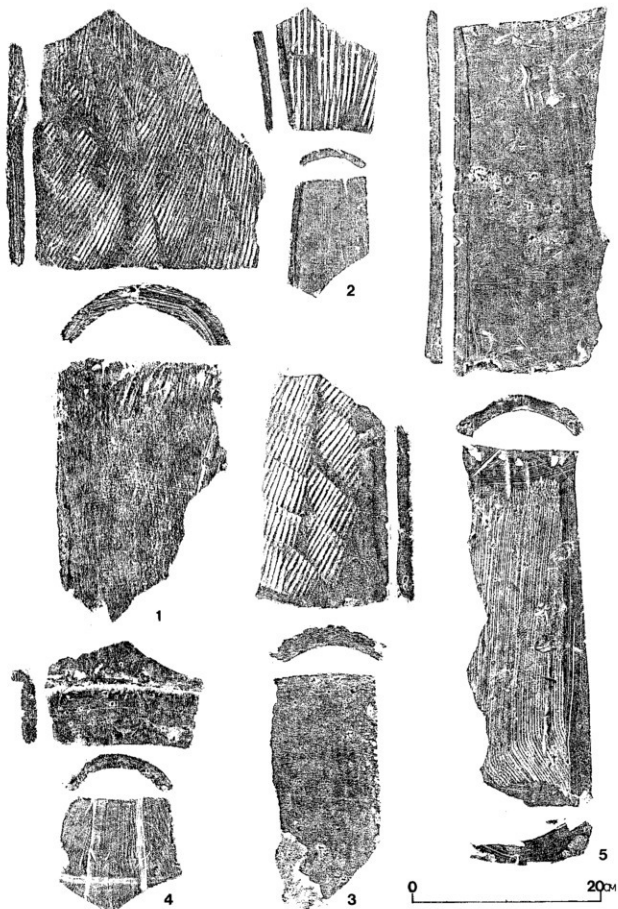
第5圖 軒平瓦



第6図 平瓦—縄目叩き—



第7図 平瓦—格子印き・平行印き・素文 (3,4,7,8は1号炉配水溝内出土)



第8圖 丸瓦



1110



1111



1112



1120



1121



1122



1130



1231



1230



1232



1220



1240



1210



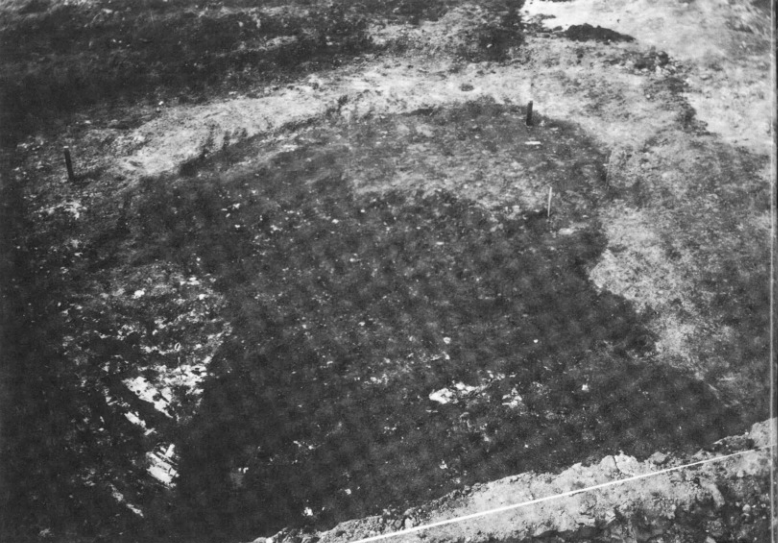
1250

第9圖 新治麿寺式屋根瓦（軒丸，軒平）基礎資料

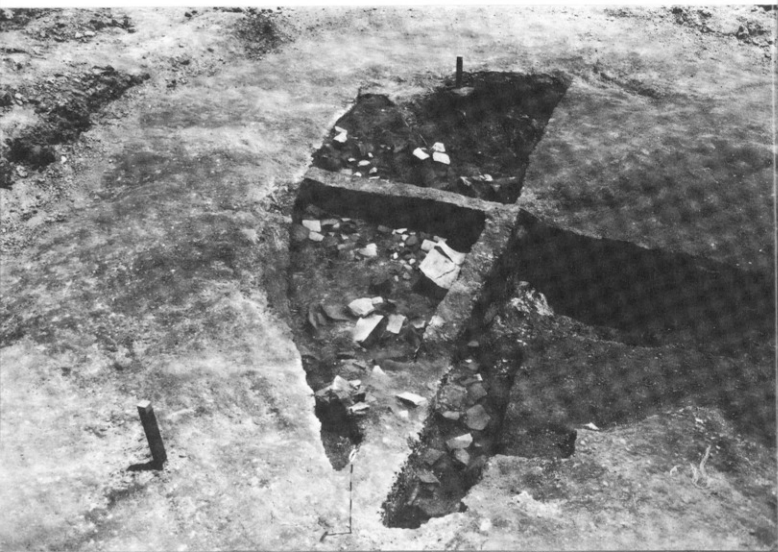


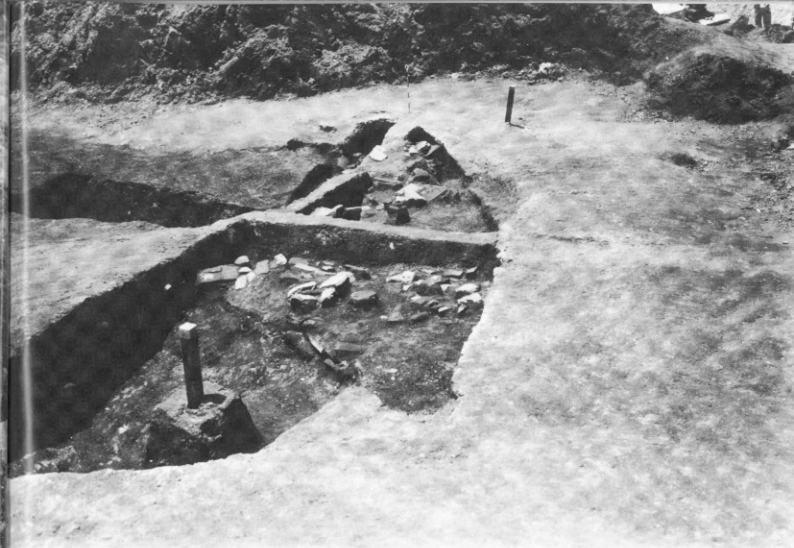
上下 遠景





上下 1号瓦窯跡





上 1号瓦窯跡

下 2号炉





1号銅製鍊炉

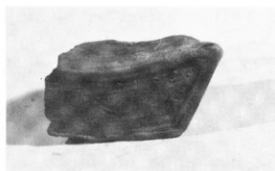
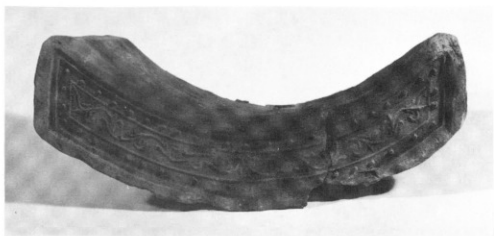




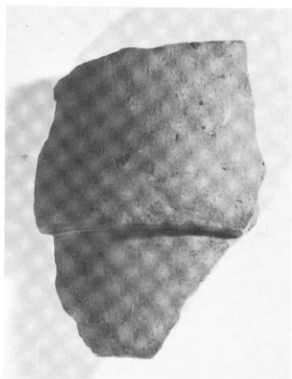
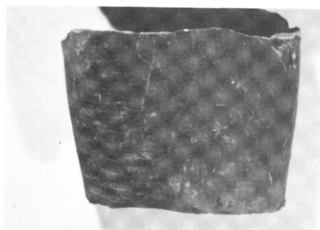
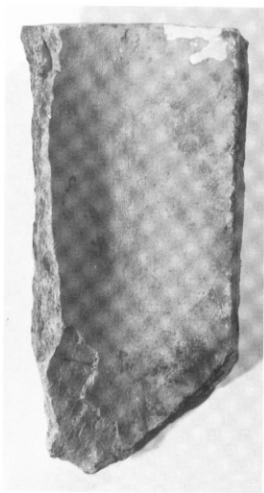
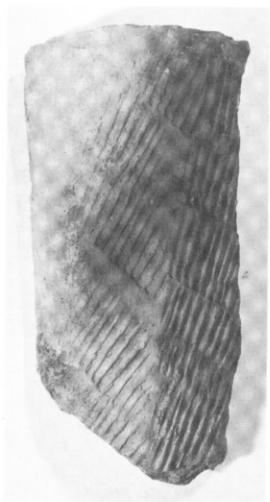
軒 瓦 (1)



軒丸瓦(2)



軒平瓦



丸瓦

新治廃寺

——久地楽長町窯跡予備調査報告書——

発行日	昭和59年3月27日
発行所	協和町教育委員会 茨城県真壁郡協和町大字門井1962の2 〒309-11 電話 029657 2511(代)
編集	協和町教育委員会
印刷所	ワタヒキ印刷株式会社 水戸市城東1丁目5-21 電話 0292 21 4 3 8 1(代)
